

地域の環境を守り育てるICT活用プロジェクト ～若手職員による子どもへのアプローチと自らの意識変革～

環境“ICT”使い隊

南丹保健所環境衛生室



推薦理由

【アピールポイント(組織力の発揮)】

《所属長:南丹広域振興局 副局長 上條 正和》

- 若手の熱意で多様な組織を巻き込み、斬新な気づきで将来を担う子ども達に“夢”を与え、地域への関心や魅力を持ってもらえる取組みとなっている。
- ICT活用は大きな可能性があり、様々な取組みに合わせて業務改善も期待する。

【プロセスの工夫、横展開が可能な点】

《アセッサー:南丹保健所福祉室 山崎 正則》

- 子ども達に森の京都の魅力を伝える手法として、全国初となるICT×フィールド型でのモデル授業の着想は素晴らしいものである。
- 産学公連携によるプラットフォームでの検討を行うなど、様々な意見集約ができる方法を用いており、施策の企画方策として参考になると考える。

取組内容(1)

➤ 取組の分野

- 創造的事業 府民サービス向上 業務効率化 職場環境改善

➤ 現状、課題

- ① 『森の京都』の豊かさを次代の子ども達に伝える“機会”が少ない
子どもの学びたいという思いを育てる環境教育ができていない
(大人の押しつけにならないように…)
- ② 保健所業務は緊急時の対応が多く、仕事と子育てなどの両立が難しい



➤ 目指す姿、状態

- ① 地域ぐるみで将来を担う子ども達に森の京都の魅力を伝えるとともに、地域への愛着を持ってもらいたい！！
子どもが自ら学び・気づき・行動できる人材になってほしい！！
- ② 働き方の意識を変え、業務効率化に繋げワークライフバランスを実現したい

➤ 取組の対象、顧客、ターゲット

- ① 地域の子ども達
- ② 保健所環境業務



➤ チーム体制、ネットワーク

- ① 産学公連携のプラットフォーム(支援体制)
- ② 環境衛生室若手グループ(子育て世代)

取組内容(2)

➤ 取組内容とプロセス

<着想(気づき)～企画立案、事業化まで>

- ① どうすれば子ども達が地域の魅力を楽しんで学べるか。
 - ◆ 主体的な学習のためにICT(タブレット等)を活用
 - ◆ 地域に興味を持ってもらうために、“森の京都”のフィールドを活用

<実行、実践の内容とプロセス>

地域の子どもに新しい環境教育をプロデュース

- ◆ 地域が一体となった『環境教育プラットフォーム』
- ◆ 全国“初”のICT×フィールド型のモデル授業



- ② ・子どもと接し、自分のワークライフバランスを見直す機会に
・タブレットを業務にも活かせるのでは？
 - ◆ 自らの意識変革(定時までには仕事を終わらせる！)
 - ◆ 現場における新しい“業務改善”を実施
 - ➡ 特に危機管理対応←突発的に時間外発生
 - ・ アプリを活用し、迅速かつ質の高い情報を共有
 - ・ 現地で、速時に業者指導を可能に

工夫したポイント(①)

- ・ 現場の声を踏まえるため、地域全体で授業内容の在り方を検討
- ・ 若手の熱意が企業からのタブレット無償提供につながった
- ・ 大学生サポーターと一緒に子どもが一人一台のタブレットを持って“森の京都”の豊かな自然で学習

工夫したポイント(②)

- ・ 携帯性・データ蓄積などのタブレットの利点に着目し、現場での“業務改善”を模索
- ・ 担当業務とタブレットの相性を検討(テーマ選定)

結果とふり返し

➤ 成果、目標達成状況

- ① 子どもへのアプローチ(“NEW”環境教育のスタイル)
 - ◆ 子どもが主体的に地域環境の魅力を学ぶプログラムを実施
 - ◆ 新しい“学び方”の提供に教育関係者から感謝の声
 - ◆ 取り組みは広報され『森の京都』の魅力発信にも
- ② 働き方の意識変革と現場でのタブレットの活用
 - ◆ 時間外勤務が縮減し、職員のワークライフバランスを実現
 - ◆ 蓄積データを用い不法投棄現場での的確な事業者指導を実施
 - ◆ 立入検査時にタブレットのデータを利用し省力化が図れた

取組から学んだ点

- ① 学校へのタブレット導入は先生の説得などハードルは高かったが、現場のニーズに合ったプログラムを提供することで解決できた
- ② 不法投棄等の事案はタブレットを使ったタイムリーな対応で早期解決につながった

➤ 今後の展開

- ① 子どもへのアプローチ(未来型環境教育の実現)
 - ◆ 地域特色を活かしたプログラムの充実(ビジターセンターなどとの連携も検討)
 - ◆ 世代を超えた環境教育(小学生～大学生)
 - ◆ 府外のICT先進地とも連携
- ② 働き方へのアプローチ(さらなる府民サービス向上)
 - ◆ 申請時のサポート、府民相談などでも活用
 - ◆ 環境のみではなく、他分野との連携(開発への相談指導等)

さらに工夫したい点

- ① 遠隔授業など、双方向コミュニケーションをすることでプログラムの幅を広げてタブレットの利活用を模索
- ② タブレットの活用法を引続き検討